

TRAVEL TO SRI LANKA



2026/03/07-15

Table Of Contents



1 ツアー行程

2

ENDANE BIODIVERSITY CORRIDOR

- A. メンバー紹介
- B. 植樹名の紹介

3

ツアー主要サイト紹介

4

感想文集

アルファベット順

3/7 (土) 関西→上海→コロンボ | 泊: コロンボ (Granbell)

3/8 (日) コロンボ→シーギリヤ/ダンブッラ石窟寺院・ポファム樹木園 | 泊: シーギリヤ (Sigiriana)

3/9 (月) シーギリヤロック観光/ウダワッタケレ熱帯雨林 | 泊: キャンディ (Thilanka Hotel)

3/10 (火) キャンディ滞在/ペラデニア植物園・市内散策 | 泊: キャンディ (Thilanka Hotel)

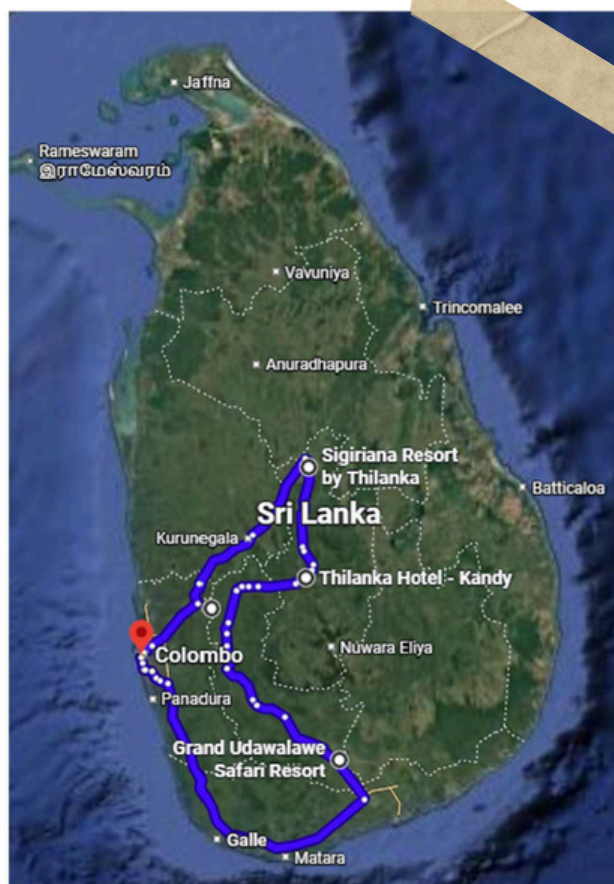
3/11 (水) キャンディ → エンダネ生物多様性コリドー訪問、植樹→グランド・ウダワラウェ・リゾート (Grand Udawalawa)

3/12 (木) シンハラジャ自然保護林 (終日トレッキング) | 泊: ウダワラウェ (同上)

3/13 (金) ウダワラウェ→コロンボ/市内観光・送別夕食 | 泊: コロンボ (Granbell)

3/14 (土) コロンボ→空港→上海 (移動) | 泊: 機内

3/15 (日) 上海→関西 (PVG 08:55→KIX 12:10) | 解散



Endane Biodiversity Corridor- Sri Lanka Dilmah Conservation

Dilmah Ceylon Tea Company PLC and Rajarata University of Sri Lanka.

Site Visit and Tree Planting Programe – 11 March 2026
with Dr.Watanabe and Nettai



Species	Family	Distribution status	Conservation status_Redlist 2020	IUCN Red List	Planted Count
<i>Mangifera zeylanica</i>	Anacardiaceae	Endemic	LC	VU	1
<i>Mesua pulchella</i>	Calophyllaceae	Endemic	EN	CR	1
<i>Garcinia hermonii</i>	Clusiaceae	Endemic	VU	V	2
<i>Dipterocarpus hispidus</i>	Dipterocarpaceae	Endemic	VU	CR	2
<i>Doona affinis</i>	Dipterocarpaceae	Endemic	VU	EN	1
<i>Anthoshorea hulanidda</i>	Dipterocarpaceae	Endemic	EN	V	2
<i>Shorea lissophylla</i>	Dipterocarpaceae	Endemic	VU	CR	3
<i>Shorea oblongifolia</i>	Dipterocarpaceae	Endemic	VU	CR	1



<i>Doona trapezifolia</i>	Dipterocarpaceae	Endemic	VU	CR	1
<i>Lijndenia capitellata</i>	Melastomataceae	Endemic	VU	CR	3
<i>Memecylon sylvaticum</i>	Melastomataceae	Endemic	VU	V	1
<i>Memecylon Cf sylvaticum</i>	Melastomataceae	New			2
<i>Memecylon sp.</i>	Melastomataceae	New			3
<i>Chaetocarpus ferrugineus</i>	Peraceae	Endemic	VU	CR	3
<i>Clausena indica</i>	Rutaceae	Native	LC		2
<i>Palaquium petiolare</i>	Sapotaceae	Endemic	VU	NT	1



Chaetocarpus ferrugineus



Doona trapezifolia



Anthoshorea hulanidda



Memecylon sp, (New)



Garcinia hermonii



Memecylon sp, (New)



Clausena indica



Shorea lissophylla



Memecylon sp, (New)



Memecylon sylvaticum



Clausena indica



Chaetocarpus ferrugineus



Lijndenia capitellata



Shorea oblongifolia





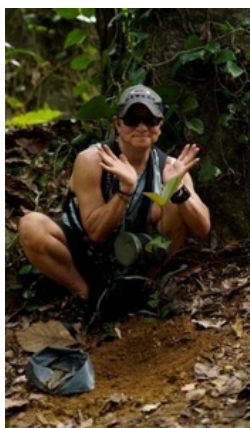
Dipterocarpus hispidus



Chaetocarpus ferrugineus



Memecylon Cf sylvaticum



Garcinia hermonii



Palaquium petiolare



Anthoshorea hulanidda



Shorea lissophylla



Lijndenia capitellata



Dipterocarpus hispidus

スリランカ・ペラデニヤ王立植物園 (Royal Botanic Gardens, Peradeniya)

この植物園はスリランカで最も有名な植物園であり、キャンディ近郊に位置し、多様な植物コレクションで知られています。(以下は Royal Botanic Gardens, Peradeniya の HP の内容を翻訳しまとめたものです)

■ 植物園の位置

ペラデニヤ王立植物園 (Royal Botanic Gardens, Peradeniya) は、スリランカ中部州の都市キャンディから西へ約 5.5 km の場所にあります。

2016 年には、120 万人の国内来訪者と 40 万人の外国人来訪者が訪れました。

植物園は、スリランカ最長の川である マハウェリ川 (Mahaweli River) の近くにあり、特に 蘭のコレクションで知られています。

この植物園には、蘭、香辛料、薬用植物、ヤシ類など約 4,000 種以上が栽培されています。

また、園に併設して スリランカ国立ハーバリウム (National Herbarium of Sri Lanka) が置かれています。

植物園全体の面積は 147 エーカー (0.59 km²)、標高は 460 m、年間降雨日は 約 200 日。

スリランカ国立植物園局 (Department of National Botanic Gardens) が管理運営しています。

■ 歴史

ペラデニヤ植物園の歴史は 1371 年までさかのぼります。

● 王国時代

- 1371 年：ヴィクラマバーフ 3 世、マハウェリ川近くのペラデニヤに宮廷を置く。
- 1747～1780 年：キルティ・スリ王が王室庭園 (Royal Garden) として整備される。
- 1780～1798 年：ラジャディ・ラジャシンハ王が滞在、仮住居が設けられた。
- 仏殿と仏塔はウィマラ・ダルマ王時代に建設、イギリス軍がキャンディを占領した際に破壊された。

ラジャシンハ 2 世とポルトガル軍の間で行われた ガンノルワの戦い (Battle of Gannoruwa) は、この川の北側で戦われたとされています。

1821 年：アレクサンダー・ムーン (Alexander Moon) によって植物園が正式に設立されました。

■ イギリス植民地期の発展

● 1810 年：スレイブ・アイランド (コロombo の中心フォート地区の南) に「キュー」植物園を開設

ジョセフ・バンクス卿の助言により、ウィリアム・カーが初代管理者に任命。

● 1813 年：カルトゥラへ移転

より大規模に経済植物を栽培するためカルトゥラへ移転。

カーは 1814 年に死去。

● 1821 年：ペラデニヤへ移転

後任のムーンにより、植物園は現在の場所に移された。

ムーンは 1824 年、「セイロン植物目録」を出版し、1,127 種の植物名 (学名・現地名) を記録した。

■ 19 世紀後半～20 世紀の発展

- 1844 年：ジョージ・ガードナーが長となり、植物園の独立した研究機関としての基盤が固まる。
- 彼の死後、トウエイツ博士が 30 年以上園を率い、蘭・薬用植物の研究で世界的評価を確立した。
- 1861 年：ハッガラ植物園を開設 (キナの導入のため)
- 1876 年：ガンパハ植物園 (Henarathgoda) を開設 (ゴムの導入のため)
- 1880 年：ヘンリー・トリメン (Dr. Henry Trimen) が園長に就任。
- 1893 年：「セイロンの植物 (The Flora of Ceylon)」出版開始 (ジョセフ・D・フッカー卿が完成させる)
- 1895 年：H.F. マクミラン氏キュレーターに任命

● 20 世紀前半～後半

- 1912 年：農務省発足
 - 1914 年：T.H. パーソンズ氏がキュレーターに就任
 - 1925 年：マクミラン (H.F. Macmillan) が退任
 - 著書「熱帯植栽・園芸ハンドブック」は今でも参考文献
 - 1945 年：パーソンズ (T.H. Parsons) が退任
 - 1945 年：D.M.A. ジャヤウィーラ氏総監に任命される。スリランカの薬用植物およびラン研究に大きく貢献
 - 1971 年：総監となったエカナヤケ氏が花卉園芸を大きく発展させた。
-

■ 現代の発展

- 1971 年：D.B. Sumithraarachchi 氏総監に就任。分類学的研究と実施植物園の環境改善
 - 2006 年：ハンバントタ近郊ミリッジャウィラ (Mirijjawila) に新植物園の建設開始
 - 独立後初
 - 約 300 エーカー、乾燥地帯植物の保全を専門としている
 - アヴィッサウェラ (Avisawella)・Illukowita には湿潤地帯植物の域外保全園が開設
 - 2016 年までに 5 つの新植物園開設の計画が推進された。
-

■ 今日の役割

現在、王立植物園は以下を管理する：

- 国内の植物園および国立ハーバリウム
 - 薬用植物園
 - 大統領・首相官邸の庭園
 - 英連邦戦没者墓地
 - アヌラダプラの聖なる菩提樹
 - その他の歴史的樹木群
-

■ ペラデニヤ王立植物園の目的

- 植物の同定、民族植物学、域外保全 (ex-situ)
 - 未利用植物・低利用植物の活用技術の開発
 - 植物園・国立ハーバリウムの管理
 - 植物に関する情報の普及
 - 一般市民・子ども向け教育
 - 花卉・造園技術の発展
-

■ 概要

- 面積：147 エーカー (59 ヘクタール)
- サテライト植物園 (別園)：ガネワッタ薬用植物園 (23ha、北西州)
- 栽培種数：4,000 種以上
- 年間来園者数：120 万人
- 管理：スリランカ国立植物園



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. メインエントランス | 16. イチジク (フィカス) コレクション |
| 2. フタゴヤシ | 17. 吊り橋 |
| 3. 針葉樹区 (パイネタム) | 18. ロイヤルパーム並木 |
| 4. エボニー (コクタン) コレクション | 19. メモリアルツリー |
| 5. ヤシコレクション | 20. シダ園 |
| 6. ソテツコレクション | 21. 教育センター |
| 7. 学生ガーデン | 22. フラワーガーデン |
| 8. 竹コレクション | 23. パルミラヤシ並木 |
| 9. 薬用植物園 | 24. キャベツパーム並木 |
| 10. ジャイアントバンブー | 25. 植物販売センター |
| 11. ロックボーダー (岩石境界園) | 26. 管理棟 |
| 12. ガードナー記念碑 | 27. サボテンハウス |
| 13. ジャワイチジク (ジャワフィグ) | 28. プランツハウス |
| 14. クック松並木 | 29. 蘭ハウス (オーキッドハウス) |
| 15. 国立ハーバリウム (標本庫) | 30. スパイスガーデン |

場所と見どころ

この非常にコンパクトな植物園には、美しいスポットが数多くあります。

探索をご希望の方には、園内を歩いて回られることをお勧めします。

- シダ園 (Fernery)
- 大芝生広場 (Great Lawn)
- 湖 (The Lake)
- スパイスガーデン (Spice Garden)
- ダブルココナッツ・ヤシ (Double Coconut Palms)
- フラワーガーデン (Flower Garden)
- 植物ハウスとサボテン (Plant House & Cacti)
- 竹コレクション (Bamboo Collection)
- 花木とアーボレータム (Flowering Trees & the Arboretum)
- オーキッドハウス (Orchid House) および園内ガーデン

オーキッドハウス

オーキッドハウスでは、カトレア、デンドロビウム、アラクニス、オンシジウム、ファレノプシス、バンダ、そしてそれらの交配種といった、エキゾチックなランの花々が来園者を魅了します。

また、オーキッドハウスの周囲では、世界最大のランである **グラマトフィルム・スペシオスム**

(*Grammatophyllum speciosum*) をはじめ、数種の**生命力の強い熱帯性ラン**を見ることができます。このランは、長さ最大 2.5 メートルにも及ぶ花序をつけます。さらに、**グリーン・オーキッド** (*Coelogyne meyeriana*) も観察することができます。

シダ園 (Fernery)

フラワーガーデンに隣接するシダ園は、交差する小道が美しく配置され、つる植物に覆われた高木により心地よい木陰が広がっています。

約 100 種の在来および外来のシダが植えられています。

大芝生広場 (Great Lawn)

モニュメントロードの近くに位置する大芝生広場で、最も象徴的なのは、巨大な生きた傘のように広がる **ジャワイチジク** (*Ficus benjamina*) です。

湖 (The Lake)

湖は正門左側の「サウスドライブ」にあります。湖畔には湿地植物が植えられ、特に有名なのが **ナイルパピルス** (*Cyperus papyrus*) です。

湖の中心にはさまざまなスイレン (*Nymphaea*) が浮かんでいます。

スパイスガーデン (Spice Garden)

正門右側の日陰にあるスパイスガーデンには、この国の主要輸出品であるシナモン、世界で最も需要の高いスパイスであるコショウ、さらにカルダモンやナツメグなどが植えられています。

1840 年に植えられた最も古いナツメグの木々はいまだに実をつけています。

ほかに、ベイリーフ (*Pimenta racemosa*)、オールスパイス (*Pimenta dioica*) も見られます。

ダブルココナッツ・ヤシ (Double Coconut Palms)

園内には 200 種以上のヤシがあり、その中でも最も注目されるのがセーシェル原産の **ダブルココナッツ (Lodoicea maldivica)** です。

植物界で最大の種子をつけるヤシで、その果実は成熟までに 5 年かかります。

これらのヤシは正門から約 100m の中央道左側、モニュメントロード沿いに並んでいます。

フラワーガーデン (Flower Garden)

オーキッドハウスの近くにあるフラワーガーデンには、一年草・多年草の花壇が整備されています。

特に印象的なのは、八角形の温室へと続く道沿いに植えられた鮮やかなコリウスのリボン状の植え込みです。温室内には日陰を好む植物が集められています。

また、園内には壮観な 3 つのヤシ並木があります：

- **キャベツパーム並木 (Roystonea oleracea)** – 高さ 21m を超える並木
 - **パルミラヤシ並木 (Borassus flabellifer)** – フラワーガーデンとリバードライブを接続
 - **ロイヤルパーム並木 (Roystonea regia)** – 中央道沿い
-

植物ハウスとサボテン (Plant House & Cacti)

オーキッドハウス近くの小さな植物ハウスには、シダ、ベゴニア、アフリカスミレ、エписキア、ディフェンバキア、カラテア、フィロデンドロン、ブロメリア、アンスリウムなどの温室植物が展示されています。

隣のサボテンハウスには、アロエ、アガベ、ウチワサボテン、セレウス、レブチア、リプサリスなど、800 点以上のサボテン・多肉植物が展示されています。

竹コレクション (Bamboo Collection)

竹コレクションは湖の右側、リバードライブ沿いにあります。

中でも **ビルマの巨大竹 (Dendrocalamus giganteus)** は世界最大級で、高さ 30~40m、直径 20~25cm に達します。

新芽は 1 日約 30cm 成長します。

その他にも、

- 黄竹 (Bambusa vulgaris)
 - 羽毛状の葉をもつ竹 (Dendrocalamus membranaceus)
 - トゲ竹 (Bambusa spinosa)
 - 中国の小型竹
- などがあります。
-

花木とアーボレータム (Flowering Trees & the Arboretum)

植物園の中で最も壮観なのは、季節ごとに開花する花木です。特に一年の前半に多くの種類が満開を迎えます。**アメースティア・ノビリス (Amherstia nobilis)** (ビルマの誇り) は最も美しい花木で、正門に並木として植えられています。

約 20 ヘクタールのアーボレータムには約 1 万本の木があり、中には 100 年以上の大木も含まれます。

サテンウッドやマホガニーなど、熱帯を代表する木材樹種も見られます。

(12 歳以上) 入園料

LKR 3,540 (スリランカ・ルピー)

Popham's Arboretum ポファム樹木園

ー 自然好きのための“隠れた名所” ー

歴史と意義

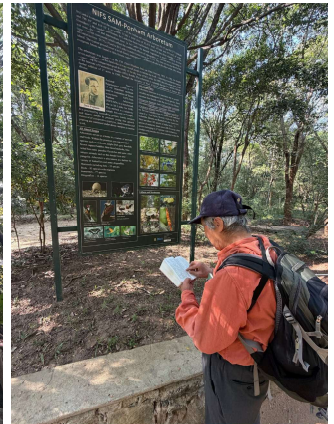
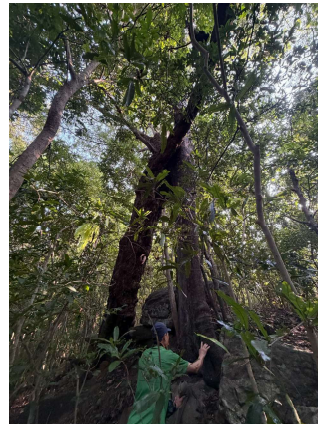
- ポファムズ・アーボレータムは、1963年にイギリス人のプランター（農園経営者）であるサム・ポファム氏によって設立。

植物と動物（フローラ＆ファウナ）

- 100種以上の在来植物が見られる。特に、以下のような希少な樹木が紹介されています。
 - アイアンウッド（*Mesua ferrea*）
 - バオバブ（*Adansonia digitata*）

観察される生き物の例

- 哺乳類：スレンダーロリス、トクモンキー（Toque macaque）
- 鳥類：スリランカヤケイ、クロガシラコウライウグイス（Black-headed oriole）
- 爬虫類：ホシガメ（Star tortoise）、オオトカゲ（Monitor lizard）



Popham's Arboretum ポファム樹木園

- 1963年にF・H（サム）・ポファム氏によって創設。低木林（荒れ地の二次林）の7.5エーカーの土地を購入。
- 1989年、基礎研究所（Institute of Fundamental Studies：IFS）へ寄贈。
- 1989年、元IFS所長であるシリル・ポナンペルマ教授の働きかけにより27エーカーが追加。現在では樹木園の面積は34.5エーカー（天王寺公園の約半分）

- NIFSサム・ポファム樹木園は、補助的自然再生（Assisted Natural Regeneration：ANR）と呼ばれる方法を用いて整備されてきました。
- ANRは、生態系修復（復元生態学）で用いられる重要な手法の一つ。
- スリランカにおけるANRの代表的なモデルとなっています。
- この方法は比較的単純で低コストな技術で、自然に発芽した森林の幼木の成長を補助し、促進するもので、具体的には、つる植物やトゲのある低木を排除し、自然更新による稚樹の成長を促します。また、着生植物の除去、枯れ枝の除去、樹冠が過密で競合が激しい場合の剪定なども、自然更新の稚樹の成長を促進するための日常的な作業として行われています。

ウダワッタケレ森林保護区



植生の概要

- 密生した森林に加え、主に
 - 放棄されたプランテーション（農園跡地）
 - 二次林（遷移段階の植生）から構成される。

植物種数（全体）

- 生育する植物は **460種**
- 内訳
 - 樹木・低木：**135種**
 - つる植物（リャナ）：**11種**
 - 固有種：**9種**
 - **2013年調査の内訳（在来種）**
 - 在来樹木：**58種（固有種7）**
 - 在来低木・小高木：**61種（固有種7）**
 - 在来草本：**31種（固有種3）**
 - うち **ラン：12種**
 - 在来のつる植物：**57種（固有種4）**

森林の層構造

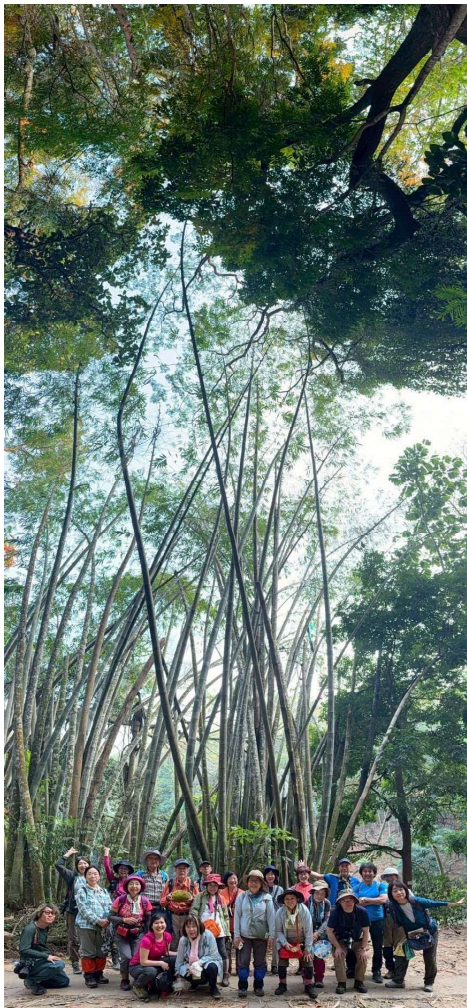
- 森林には以下の層が存在
 - 突出層
 - 林冠層
 - 林床層
- ただし、上層2層が非常に密なため、林床層は全域に存在しない。
- 特に林床層が乏しい区域：侵入植物が広がっている場所
 - ペルーバルサムノキ（*Myroxylon balsamum*）
 - マホガニー（*Swietenia macrophylla*）
 - デビルズ・アイビー（*Devil's Ivy*）
 - ラタンヤシ（*Calamus*属）
 - 成熟したラタンヤシが多く生育（2種）
 - つる性ヤシの一部は 25m以上に達し、樹木に絡みながら伸長する
 - 他地域では、籐（とう）利用のため若木が伐採されることが多い

外来種の侵入状況

- 森林の約半分、特に南西側で外来樹木・つる性植物の侵入が深刻
- 侵入が強い区域では、在来植生・動物相がほとんど生き残れない

外来種の種類数（森林全体）

- 外来樹木：**16種（うち侵入性7種）**
- 外来低木：**6種（うち侵入性1種＝コーヒー）**
- 外来つる植物・匍匐性植物：**6種（うち侵入性3種）**
- 外来草本：**6種（うち侵入性1種）**



ウダワッタケレ森林保護区：脅威（Threats）

過去の問題

- 不法占拠者（スクワッター）による侵入
- 周辺土地所有者による土地の囲い込み（ランドグラブ）

現在の最大の脅威

- **侵入性の強い外来植物種（導入種）**
- 在来植物・樹木を圧迫し、それに依存する動物・昆虫にも悪影響

外来侵入種が急増する理由

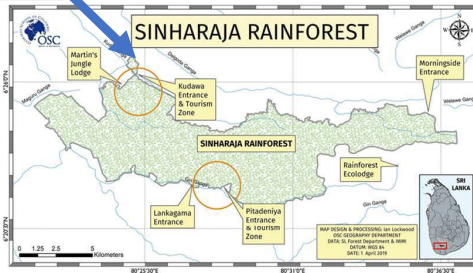
- 病気・昆虫・捕食動物などの**天敵がい**ない
- そのため本来の生息地よりも**繁殖・増殖が速い**

侵入の深刻度

- 森林の約半分がすでに
 - 外来樹木
 - 外来つる植物

エンダネ生物多様性コリドー（Endane Biodiversity Corridor）

クダワ入口



ナラカ・ギーキヤナゲ博士（Dr. Nalaka Geekiyanage）は、植物機能生態学を専門とする研究者で、熱帯林における植物の適応や生態に関する研究を行っています。京都大学大学院（日本）および広西大学（中国）で研究トレーニングを受け、現在はスリランカ・ラジャラタ大学農学部植物科学科にて森林学の講師を務めています。国際的な生態学ネットワークにも積極的にに関わり、次世代の生態学研究者の育成や国際協力にも取り組んでいます。

今回のツアーでは、渡辺先生が以前指導されたことのあるナラカ博士がシンハラジャにおられることもあり、現地での学びを深める機会として、シンハラジャ訪問が旅程に組み込まれました

プロジェクト内容 Youtube



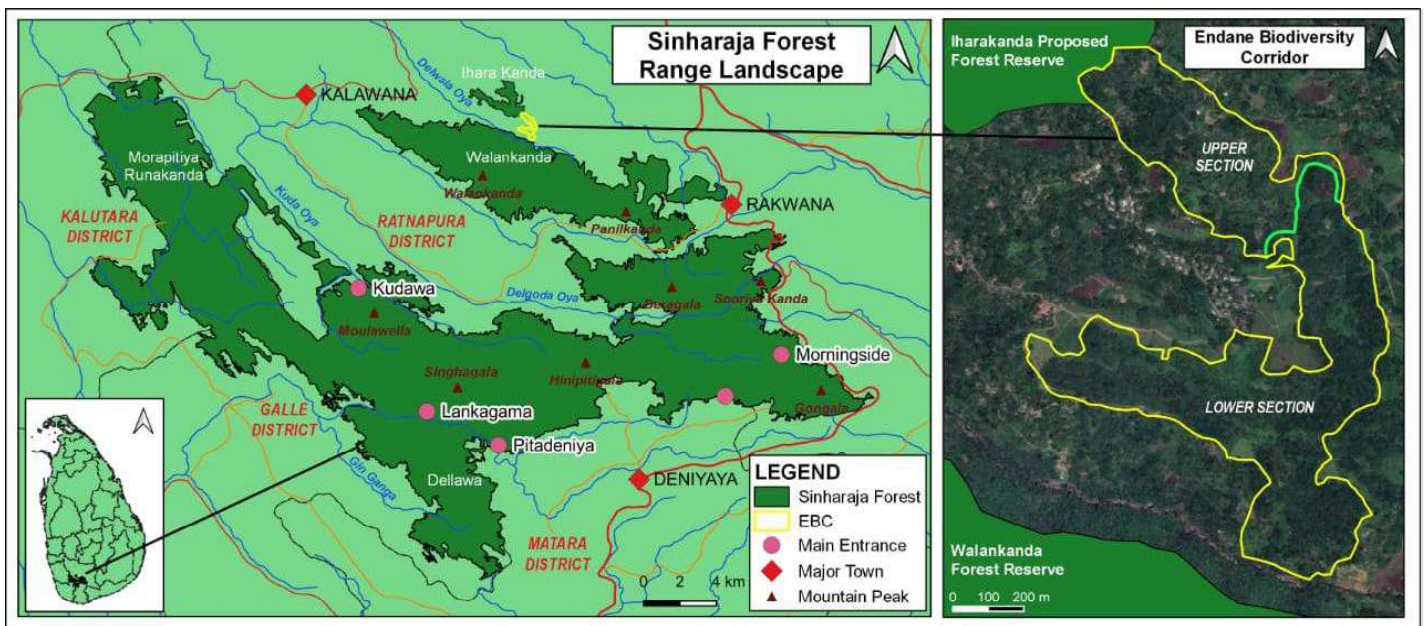
<https://www.youtube.com/watch?v=Sqhet19chdU>

プロジェクト内容 Webサイト



<https://www.dilmahconservation.org/initiatives/sustainability/biodiversity-corridor-endana.html>

ナラカ博士の取組 エンダネ生物多様性コリドー（Endane Biodiversity Corridor） 【下記の地図上の黄色の枠で囲まれた地域です】



- ディルマ社のエンダナ茶園（Endana Tea Estate）内で、**デルワラ・カンダ森林保護区（Delwala Kanda Forest Reserve）**と**ワランカンダ森林保護区（Walankanda Forest Reserve）**を結ぶ約3kmの回廊エリアにおいて植林が実施されています。
- 数百年にわたり分断されてきた2つの森林保護区を再びつなぐことを目指す革新的なプロジェクト

シンハラジャ自然保護林・終日トレッキング

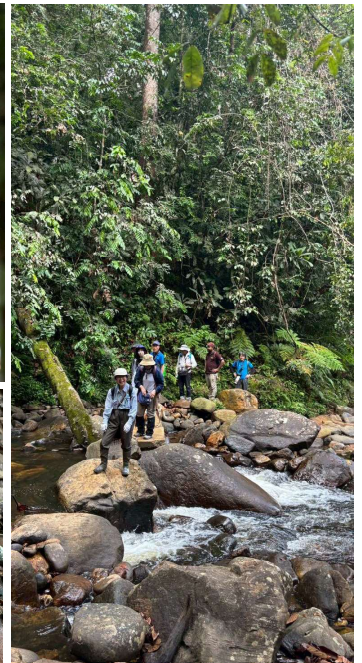
この熱帯雨林は、ジュラ紀（約2億年前～1億4500万年前）に形成された可能性が高い。

森林の面積は36,000ヘクタール（**大阪市の約1.6倍**）

この保護区は東西に21km、南北は最大でも7kmほど

樹木・昆虫・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類など、多くの固有種を含む“生物多様性の宝庫”。

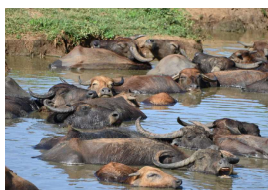
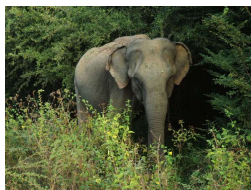
シンハラジャ森林の植生密度は、1ヘクタールあたり24万本と推定されており、これはアジアで最も密度の高い熱帯雨林とされています。



第6日（3月12日木）
トレッキングは（ピタデニヤPitadeniya）入口から入りました。

ウダワラウェ国立公園（Udawalawe National Park）

- ワラウェ川に建設されたウダワラウェ貯水池（Udawalawe Reservoir）の造成によって生息地を失った野生動物に避難場所を提供するとともに、貯水池の集水域を保護する目的で設立された。
- 保護区の面積は308.21平方キロメートル（大阪市の約1.4倍くらいの広さ）
- 1972年6月30日**に設立
- 国立公園に指定される以前、この地域は移動耕作（チェナ農法：chena farming）に利用されていた。国立公園の指定後、農民は段階的に移転させられた。
- 水鳥にとって重要な生息地であると同時に、スリランカゾウの重要な生息地でもある。
- 国内で**3番目**に**来訪者数の多い国立公園**となっている。



行ってよかった！スリランカ

H.S

スリランカの犬は幸せワンワン 道端、お寺、市場の通路、土産物のお店、トレッキングのコース。空港やドアのあるレストランやショッピングモール以外はほとんどどこにでもワンちゃんがいて、完全無防備で昼寝をしている。鼻先3センチを歩いても起きない。まるで自然の風景に溶け込んだように雑踏の中でも炎天下でも安心してきって寝ていた。多分、スリランカの人達は犬にやさしく接してきたのだろう。シンハラジャの子犬、本当にかわいかった。



登れてよかった！ シーギリアロック 3月9日(月) どうやって

あんな岩山の頂上に宮殿を作ったのか？登れる自信はなかったが、カーシャパの伝説を知ってからは是非とも登ってみたいとなった。7年かけて作ったというが、機械も動力もなかった昔、カーシャパの心境も想像を絶するが、それを設計し、指揮した人々の知恵、多くの犠牲を伴ったであろう建設に携わった人々・・・う～～～ん、ちょっと想像がつかない。が、熱中症寸前、塩分チャージと水で体調管理しながら自分の足で頂上まで行けたのはうれしかった。弟に攻められ、王位について11年後に自ら命を絶ったカーシャパ。500人の美女に囲まれ、何を思って日々暮らしたのか？知る由もないが気にかかる。シーギリアレディーの本物も目の前で見た。それがなぜ描かれたのかはわからないが、1600年の時を超えて今もなお微笑む姿に不思議な感動を覚えた。



オオコウモリに会えた♪ 3月10日(火) 南大東島でダイトウオオコウモリに出会ってからなぜかオオコウモリにハートをつかまれてしまった。渡辺先生が目の前でフクギの実を食べているオオコウモリの写真を見せてくれ、あのフワフワマフラー姿とつぶらな瞳に一目ぼれしてしまったのだ(^_^♪ 前日、ウダワッタケレに向かう途中、キャンディー湖のほとりの大木にオオコウモリがいっぱいぶら下がっていた。ムフフフ♪でも、バスの中からではしっかり見れない。で、ペラデニア植物園後の自由行動で、仏歯寺～市場へ行った後、星田さんと二人、オオコウモリウォッチングコースを取った。キャンディー湖畔を歩いても歩いてもオオコウモリのオの字(?)にも出会えず、うっそ～と思いつつも、「ゴイサギみたいやん。」とか「カワセミちゃう？」とか言いながらなおも歩いていくと・・・ありました！クリスマスツリーならぬコウモリツリー！！カメラやスマ



ホや双眼鏡で撮りまくり、覗きまくり・・・でも逆光で画像は今一つ。せめて飛んでいるお姿でもと思えども、ちょっと右手(?)を動かしては閉じ、左手(?)を伸ばしては閉じと、

なかなか飛んではくれない。首は痛くなるし、ホテルまではかなりの坂道だし、まあ、この目でしっかり見れたのだからと、切り上げた。(朝だったらもっと鮮明に写せたのだろうが、あの距離をもう一度歩く勇気はない！！) 翌日、移動バスの中で、末松さんが撮ったモフモフマフラーのオオコウモリの写真をいっぱい見せてくれた。う～～ん、やっぱりかわいい～～。いつか私も南大東に行って手の届く距離でこの目で見て、写真を撮りたい！！

(オオコウモリメモ) インドオオコウモリは翼開長 1.2~1.5m。世界最大級のオオコウモリ。日中は大木に群れて逆さにぶら下がり、夜は果実や蜜を求めて飛び回る、主に植物食のフルーツコウモリ。視覚が発達しており、エコーレーション(超音波)は使わず、大きな目を使って視覚と嗅覚で行動する。

本当は翼を広げてこんな風に飛んでいるのを見たかったな～～！！ ➡



ナラカさん達の壮大な計画と熱意には頭が下がります 3月11日(水)

スリランカは世界でも有名な紅茶の産地。長年、熱帯雨林を切り開いて茶畑にしてきた。ナラカさん達は、数百年にわたり分断されてきたデルワラ・カンダとワランカンダの二つの森林保護区を再びつなぐことを目指す「エンダネ生物多様性コリドー」というプロジェクトを進めている。森がつながれば動物たちも行き来できる。ナラカさん達はその地にもともとあった木々の苗を育て、3キロメートルに渡る回廊エリアの植林をしている。今回私たちがほんのわずかだが植林のお手伝いをさせていただいた。熱帯雨林といえども苗が大木に成長するまでには何十年もかかる。一生を費やしても結果が見られるという確約はない。それでも今やらなければいつやるのだという熱い思いで取り組んでおられる。3月8日、ポファム樹木園を訪れた時、スタッフの方が「スリランカへ来られて、ポファムへの訪問を選んでくれたことをうれしく思います。」と本当に感謝をこめて言っておられたが、森林の保護や再生の大切さを理解している人たちへの熱い思いが伝わってきた。今やらないといつやる？自分がやらないと誰がやる？長い年月のいる壮大なプロジェクトに携わる人たちに心から敬意を表したい。



やっぱりヒルはいた！シンハラジャ自然保護林3月12日(木)

ジュラ紀に形成されたらしい熱帯雨林。アップにすると恐竜かと思われるようなカンガルートカゲがかわいらしかった。ワイルドバナナやワイルドなんか？が多かったが、ゴールの滝で泳いでいたわがメンバーも結構ワイルドだったぜ～～～(^^♪ やっぱりヒルに献血した人もいましたね～。私は全身ヒル進入禁止です！！何が怖いって、ヒルほど怖いものはありません！



手の届くところにゾウさん！3月13日(金) ウダワラウェ国立公園のサ

ファリは本当に素晴らしかった。カラフルなハチクイやクジャクのダンス、こんなんあり？と思うほど近くで見たゾウさんたち。青い空と水鳥の遊ぶ湖、まるで別世界でした。これが本当の自然なんだな～。でもここだって、周りは深い溝と電気柵で囲われて、動物たちは自由に移動できないんだ・・・。

スリランカは新旧入り混じったこれからの国との印象を受けました。たった1週間ほどで到底理解はできないけれど、行ってみて本当によかったです。同行の皆様に感謝します。

世界遺産シーギリヤロック観光

出発前 1300 段も登れるかと心配していたが上がれて、天空に浮かぶ岩上の王宮に感激、岩山中腹の世界に広く知れ渡る壁画シーギリヤレディに会えた事。1500 年前、頂上に王宮を築いたと驚嘆した。

動物と出会う森林公園

夜明け前の出発、ジープサファリ

野鳥ウォッチング 迫力満点の野生動物と触れ合うチャンス！

赤ちゃんを含む象の群れ、求愛姿の孔雀。羽を広げて裏を見せてゆっくりターン、正面で美しい羽根を披露。ワニや水牛の群れ、

経験豊富なガイドの案内で見れた。

プール付きの高級リゾートホテル、豪華なバイキングスタイルのカレーなるスリランカ料理。

道路脇にバスを停めて、フルーツ屋台で渡辺先生お薦めのもんで食べたドリアンの味。

騒音とクラクションの中、見事なハンドルさばきのバス移動

古都キャンディ、首都コロomboの自由時間に乗ったトゥクトゥク

値切った料金を渡した時、肩をすくめて、悔しそうな笑顔が印象的だったドライバー

どれもこれもすべてが楽しいスリランカ旅行の 1 ページとなった

旅行中知り合った人々、目をキラキラさせて渡辺先生の説明にメモし、写真を撮る植物愛と好奇心に感服した。

この旅行を開催するに当たり、すべての人に

ボホーム ストゥティイ !!



スリランカ自然観察ツアー報告

一般財団法人京都園芸倶楽部
畑山 裕子

10年ほど前から、マメ科植物が豊富に植栽されているパラデニア植物園をいつか訪れたいと願っておりました。このたび念願が叶い、今もその余韻に浸っております。ツアーにお誘いくださいました渡辺先生に心より感謝申し上げます。また、ツアーを牽引してくださいました中西様、宇塾様にも深く感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

【3月7日第1日目】

午前9時20分、関西空港を飛び立った瞬間から、旅のスイッチが一気に入った様でした。上海を経由し、夜遅くコロンボに到着。南国特有の湿った空気がふわりと肌にまとわりつき、「いよいよスリランカに来たのだ」と胸が高鳴りました。

案内には“インド洋に面した素敵なリゾートホテル”と記されていたが、その魅力を知ったのは旅の最終日、再び宿泊した際でした。27階のインフィニティプールの先には、インド洋が空と海が溶け合うように広がり、Barからはコロンボ市内の素晴らしい眺望が広がっていました。

【3月8日第2日目】

スケジュール変更で向かったダンブッラ石窟寺院。登り口に差し掛かった瞬間、視界いっぱいに広がったのは、キバナモクワンジュ (*Bauhinia tomentosa*) の鮮やかな黄色。朝の光を浴びて輝く花々に心を奪われ、気づけば夢中でシャッターを切っていました。結果石窟寺院にはとうとう辿り着けず、花に魅了されたまま時間が過ぎていきました。バウヒニア属は世界に約190種あり、キバナモクワンジュもその一つで、葉や樹皮に抗酸化成分があり薬用やアーユルヴェーダ・伝統医療として利用される有用なマメ科植物です。

続いて訪れたダンブッラのポッフাম樹木園は、静寂と緑に包まれた広大な空間でした。スリランカの国樹アイアンウッド (*Mesua ferrea*) やバオバブ (*Adansonia digitata*) の紹介があり、楽しみにしていましたが、短時間の訪問では探し出すことができませんでした。資料には10数種のマメ科植物が紹介されていましたが、樹齢60年以上の古木タマリンド (*Tamarindus indica*) と紅木紫檀 (*Pterocarpus santalinus*) のみ確認できただけでした。珍しい *P. santalinus* の花や豆果には、いつか必ず出会いたいと思いながら、小鳥のさえずりが聞こえる整備された静かな散策路を巡りました。



キバナモクワンジュ・花



タマリンド・根



紅木紫檀・葉

【3月9日第3日目】

今回の旅のハイライトの一つ、シギリヤ・ロックへ。「いざ出陣！」と気合い十分に出発したものの、1200段の階段に怖気づき、早々にリタイアしました。木陰で渡辺先生と休息しながら、以前BS放送「世界遺産ワーカー『シギリヤの古代都市』」で見た頂上からの景色を思い浮かべ、周囲のマメ科植物を観察してのんびり過ごしました。

バス停付近には筒状の豆果をつけたマメ科の木が立ち並び、*Cassia* 属までは分かったものの、種小名の特定にはもう少し時間が必要です。パラデニア植物園で尋ねたところ「*Cassia fistula*」との回答でしたが、葉の形態から見て明らかに誤りと思います。

ビルマネム (*Albizia lebbbeck*) の豆果が風に揺れ、モダマ (*Entada*) 類と思われる蔓が若葉を伸ばしている姿も見られ、植物観察の楽しさが尽きませんでした。

その後、下山された皆様と合流し、ウダワッタケレ森林保護区へ。460 種の植物が生育する森との紹介に胸が躍りましたが、整備された道を歩く工程では、期待していたペルーバルサムノキ (*Myroxylon balsamum*) には出会えませんでした。

一方、案内図に位置が記されていたエンタダ・プサエサ (*Entada pursaetha*) には無事に遭遇。樹齢 200～300 年とされる巨大な根と蔓は圧巻で、生命力の塊のようでした。

ただ、根の雄大さは奄美大島住用村のモダマの方が勝っているようにも感じました。

調べるうちに、*E. pursaetha* がアーユルヴェーダや伝統医療において非常に重要な薬用植物として利用されていることを知り、モダマ属への理解がさらに深まりました。

帰りのバス待ちの場所に、チョウマメ (*Clitoria ternatea*) が一輪咲いていました。



Cassia 属・豆果



ビルマネム・豆果



エンタダ・プサエサ・根



チョウマメ・花

【3月10日第4日目】

いよいよ今回の旅で最も楽しみにしていた「ペラデニア植物園」へ。ホテルを出て 40～50 分、バスで走る右手に、ヨウラクボク (*Amherstia nobilis*) の花が次々と姿を現し、そのたびに胸が高鳴りました。

正門前に到着し、入園を待つ間も心はそわそわ。そしてゲートをくぐった瞬間、目の前に広がったのは、ムユウジュ (*Saraca asoca*) の満開の大木。さらに前方にはイエロー・サラカ (*Saraca thaipingensis*) の大木も花を咲かせ、左手には白花のバウヒニア (*Bauhinia sp.*) が咲き、まさに夢のような光景が広がっていました。ムユウジュはお釈迦様がお生まれになる時に咲いていた花として菩提樹、沙羅双樹とともに仏教三大聖木の一つです。

園内を歩いて巡った後、予約していたカートで一周。昼食は熱帯で最も美しい花と呼ばれるムクナ (*Mucuna bennettii*) が、自由に蔓を伸ばし咲き乱れる下で持参のサンドイッチをいただき、満足度は 100%、至福のひとつでした。

パラデニア植物園では本当に多くのマメ科植物に出会いました。特に心奪われたのは、メキシコ南部からブラジル北部にかけての中南米原産のブロンズ・シャワー (*Cassia moschata*)。初めて見る種であり、高い位置に咲くオレンジ色の花が満開で陽光を浴びて輝き、夢中でシャッターを切りました。

休憩後もヒスイカズラ (*Strongylodon macrobotrys*) の花や豆果に出会い、さらにカートで薬用コレクションや研究用庭園を巡り、植物園の魅力を隅々まで味わい満喫しました。

パラデニア植物園は、シンガポール植物園やボゴール植物園より素朴ながらも、熱帯の花が咲き乱れる魅力的な植物園でしたが、念願であった蟻と共生するスリランカ固有種の *Humboldtia laurifolia* や、同じく固有種 *Derris zeylanica* には、カートからマハヴェリ川沿いに目を凝らして探しましたが出会えませんでした。

事前に植物園へ問い合わせたが返事はきませんでした。園内には植栽されていないのかもしれませんが。



ヨウラクボク・花



ムユジュ・花



イエローサラカ・花



バウヒニア SP.・花



ムクナ・花



ブロンズシャワー・花



ヒスイカズラ・花

【3月11日第5日目】

シンハラジャへ移動し、ナラカ・ギーキヤナゲ博士とスタッフの皆様に温かい昼食をご用意いただきました。博士から「エンダネ生物多様性コリドー」での素晴らしい取り組みについて伺い、その後植樹を体験しました。苗木が大きく育ってほしいと願っています。

移動中、バリ島でも見た赤いひげをつけたようなカリアンドラ・カロティルス（*Calliandra calothyrsus*）の花が咲いており、博士の宿舎周辺にも同じ花が咲いていました。

植樹後は、スリランカで最も有名な Dilmah 社のサバラガムワ地方の ENDANE ESTATE 内にある ENDANE TEA FACTORY（製茶工場）を博士にご案内いただきました。同じ茶葉からさまざまな紅茶が生まれる工程を丁寧に説明していただき、紅茶の奥深さを知り感銘を受けました。

茶園には所々にマドルライラック（*Gliricidia sepium*）が植栽されており、この木は成長が非常に早いことが特徴で、土地改良・緑肥・日よけ・風よけとして利用されます。花が咲いてなく残念に思いました。



カリアンドラ・カロティルス・花



マドルライラック・木



3月12日 ネットアイクズ・花

【3月12日第6日目】

この日はシンハラジャ自然保護林で終日トレッキング。ヒルに血を吸われ、蛇もいたため（穴に潜んでいたとのこと）、今回の旅行で最も難儀な一日となりました。淡々と歩き続ける行程でしたが、川の橋のたもとや保護林入口でネットアイクズ（*Neustanthus phaseoloides*）を見つけたときは感動しました。ネットアイクズは熱帯地域に分布し、緑肥や飼料になります。スリランカでは、この豆の花とよく似たハッシュウマメ（*Mucuna pruriens*）が植栽されています。ハッシュウマメは、天然の L-DOPA を高濃度に含み、ドーパミン前駆体として神経系を強くサポートするハーブとされ、アーユルヴェーダでも利用されるマメ科植物です。現在でも「若返りの豆」や「パーキンソン病に効く」と注目され、Facebook に「ムクナ豆愛好会」があり、いろいろ発信されています。

【3月13日第7日目】

朝4時30分起床。まだ薄暗い中、サファリジープでウダワラウェ国立公園へ向かいました。この公園はスリランカで最も美しい日の出が見られるスポットとして知られており、木々の向こうから太陽が昇る瞬間は、言葉を失うほど美しく感動しました。

夜明けとともに灌木の茂みから突然ゾウが現れ、思わず悲鳴があがり、ガイドから「静かに」と注意をされつつも、スリランカゾウのファミリー、ワニ、バッファロー、クジャクの求愛ダンスなど、次々現れる野生の姿に心躍り、盛りだくさんなエキサイティングな観察となりました。

園内に点在していたマメ科植物は、後日調べたところバウヒニア・ラケモーサ (*Bauhinia racemosa*) と判明。豆果がたわわに実り、若葉や樹皮はゾウの食料になるとのことでした。他にも多くのマメ科植物が自生しているようで、次回は花の季節に訪れたいと思っています。

6名で乗ったジープはいつしか「アマゾネス部隊（最強の女部隊）」（勝手に命名）と名付けられ、大阪市の約1.4倍の広さを駆け巡りながら、自然を大いに楽しみました。



バウヒニア・ラケモーサ・豆果



シロゴチョウ・花



シロゴチョウ・葉

【3月14日第8日目】

最終日の自由時間、半田さんと二人でコロombo最大のペタ市場へ。

半田さんの見事なトゥクトゥク値段交渉に感心しつつ市場に到着しましたが、広大な市場で野菜売り場に辿り着くまでも、彼女の鋭い勘と話術が大活躍でした。

野菜市場では多くの写真を撮影し、マメ科らしき葉を見つけ店の方に尋ねたものの分からず、Googleカメラで調べるとシロゴチョウ (*Sesbania grandiflora*) と判明。3月12日にシンハラジャへ向かう途中のレストラン前で見た白い花の葉で、タイでは花がよく売られていますが、葉を売っているのは初めてでした。炒め物、カレー、スープなどに利用されるとのこと、生のまま試食しましたが、味は正直いまひとつでした。花も生・茹でる・炒める・カレーに入れるなどして食べられます。

買い物を終え、トゥクトゥクで Dilmah 社の t-Lounge へ向かい、冷たい飲み物で一息つき、近くにあるコロombo一番のチリクラブ店「Ministry of Crab」で、クラブカレーを堪能。

この界限は、コロombo旧市街フォート地区にあり、植民地時代の面影が色濃く残るエリアで、半田さんとの“ゴールデンコンビ”（勝手に命名）で、旅の最後の半日を心ゆくまで楽しみました。

多くの方々に支えられ、数えきれないほどのマメ科植物と出会えた旅でした。ありがとうございました。

出会った多くのマメ科植物、特にペラデニア植物園のマメ科については、後日写真も含め詳細なレポートにまとめる予定です。



半田さんとカニ料理



イロモドリノキ・花



チョウマメモドキ・花

スリランカ🇱🇰の旅

20260307～20260315 劉岱

スリランカに行くのは初めてでした。海外はあんまり行ったことがなく、中国～日本、ボルネオ（マレーシア）、そしてなんとスリランカでした。いつものことですが、しっかりとした準備はもちろんできずに、出発日の早朝に1時間で旅の荷造りをしました。事前に用意したのが一つだけ、蚊に大変好かれる体質なので、なんとなく虫除けは前もって買ってきました。

ご飯



ご飯はなんでも美味しかったです。ほとんどはビュフェ形式で、ついつい食べ過ぎてしまいます。カレーはもちろん、果物も美味しいし、特に好きになったのがKottu Roti（左写真）、中国の「炒餅」と似たような食べ物で、とにかくうまうまでした。あと、屋台で食べたエッグホッパーも忘れられない美味しさでした。

市場

Kandyではセントラル・マーケット、Colomboではペタ・マーケットに行きました。自分で野菜も作っているので、ローカル市場ではどんな野菜や果物たちと出会うのが楽しみしていました。ビー玉サイズのチビ茄子、大きいすぎる四角豆、バナナは何種類もあるし、グアバやワイルドマンゴーも普通にありました。

植物

今回の一大目的はもちろん植物で、普段見たことない色んな木、草花、特に豆科（笑）を堪能してきました。マメ子さんがすぐ学名を言うのがレベチすぎて、凄かったです。ペラデニヤ植物園、次回も行きたいと楽しみにしています。

鳥、動物たち



嬉しいことで、今回で旅では鳥も動物もたくさん観察できました。接近距離でアジアゾウの群れ、頑張って求愛ダンスしていた♂孔雀、動きが早くて上手く写真撮れなかった国鳥セイロンヤケイ、などなど。その中、スリランカコサイチョウ（左写真）とセイロンガマグチヨタカが観られ大満足です。

スリランカは思ったより英語が通じませんでしたので、片言でもシンハラ語を少し覚えてみようと思いました。最後に、パワフルな皆さまと一緒に素敵な旅の時間を過ごせたのがすごく楽しかったです。また次の旅でお会いできると嬉しいです。ありがとうございました！！）



予想を超えたスリランカツアー、とんでもなく濃い旅でした

宇埜 可南子

渡辺先生と行くボルネオツアーに参加したのは、2024年10月のこと。
「第2弾をいつにしようか」という話が出た。

そのとき私は、ほんの少し迷った。
スタッフか…。前回はそれなりに大変なことはあったし、2回目もちゃんと手伝えるかな…？

返事をしないままにしているうちに、話はいつの間にか別の方向へ進んでいた。
「渡辺先生は今年はスリランカへ行くそうだ？」

え、スリランカ？！
行ったことないとかや、行きたい！！！一かなり心が動いた。

渡辺先生が目指しているのは、ペラデニヤ植物園。
なんかしらん植物園やけど、渡辺先生と行くならきっと興味深いに違いない。
何より、スリランカが気になる。カレーも食べたいし、紅茶も飲みたい。

そんな風に、いつも通り、このままこの流れに乗ってみようと思った。
そして「行きます」とお返事をした。

それからがおもしろかった。

渡辺先生のご家族にはスリランカ出身の方がおられること。
娘さんもスリランカとつながりがあること。
現地のツアー会社を紹介してもらえること。
さらに京都大学でつながりのある現地の研究者のプロジェクト地を訪問できること。

そして——シンハラジャ。
スリランカで一番行きたいと思っていた森。
話は次々と広がり、気がつけば「これはかなりいい旅になるのではないか」という気配が漂っていた。
ツアーの具体的な中身は渡辺先生繋がりで紹介していただいた、現地ツアー会社のサノジさんと中西さんが密に話を詰めている。

私の担当はツアーの飛行機をどれにするか、そして値段設定が妥当かの調査だ。

「この値段はどうなんだろう…？高くない？！」
素人のくせに、どの航空便が安くてトランジットがいいかを調べたり、大手旅行会社のツアー内容や価格を比較してみたりした。わりと真剣だったと思う。

そもそも私の旅は、いつも復習型だ。
下調べはほどほど。
現地に着いてから気分で行き先を決め、街の空気を感じる。
そして帰国してからその国のことを調べ直し、思い出をもう一度味わう。

だいたいこんなもんでいいかの旅が多かった。
しかし今回は違う。これは個人のふらり旅ではない。

出発までにスリランカの本を読み、シンハラジャのハイキングの行程やプロジェクト地のYouTubeを見て、少しばかり勉強もした。

すると不思議なことに、これまで知らなかった旅の楽しみ方も見えてきた。
「予習する旅」というのも、なかなか悪くないかも。

今回のツアー「スリランカ 自然と世界遺産の旅」

旅の中身については、きっと他の参加者のみなさんがそれぞれに綴ってくれるだろう。
私がいちばん印象に残っているのは、ペラデニヤ植物園。

もともとの行程では、植物園は半日だけだった。
しかし参加者は植物 Lover の集まりだ。一般的な観光よりも植物をじっくり見たいはずだと思い、サノジさんに無理をお願いして、植物園を丸一日訪問する行程に変更してもらった。

これでみんな大満足だろう。私はそう思っていた。

当日、一度ランチに外に出て再入場する手続きに手間取った。私たちのツアーガイドのブティカさんが、なんとか交渉してくれた…（と思う。彼とはスムーズには英語で話せない。）
再入場の説明書きがされたチケットを受け取ってから、私は念のため案内しました。

「今日はこのツアーの一番の目玉、ペラデニヤ植物園です。

もし途中離脱して、午前中だけ植物園を見て、午後はキャンディ市内を自由行動したい方がいたら手を挙げてください」

すると—

手が挙がる。挙がる。挙がる。——渡辺先生も手を挙げているではないか。
みなさん、満面の笑顔だ。

その人数の多さに、吉本新喜劇ばりにこけそうになった。
普通の観光地にも行きたいんか——い。

メンバーも濃かった。旅の内容も濃かった。
こんなツアーは、そうそうない。

ここ数年、私は少しだけ「普通の観光旅行」に飽きていた。
それでも旅は続けたい。では次はどんな旅ならおもしろいのだろう、と考えていた。

だから今回の旅は、かなりおもしろかった。誰かが作った旅ではなく、みんなで作っていく旅。
最初から関わった私は、より多く旅を楽しんだのではないだろうか。

「熱帯部をやってみて、よかったな」と、ふと思った。

次は北タイツアーが決まっている。
その次は、もしかすると雲南だろうか。
そんな話をしながらの帰りの飛行機の中。
いつも旅の帰りはすこし寂しくなる。

でも今回は違った。
ずっとニヤニヤしていた。
心の中は、ほこほこして、わくわくしていた。

NETTAI(熱帯部)のSNSでは今回のツアーの様子を紹介しています。
よろしければ、ぜひのぞいてみてください。
そしてまた、次の旅でお会いしましょう。



東南アジアでは樹木の花・葉・果実が調理され、野菜として日常的に食べられている。これを「樹木野菜」と呼んでいる。シロゴチョウ、インドイセندانなどの花、ワサビノキ、ギンネムなどの葉、ジャックフルーツ、ソリザヤノキなどの果実などだ。もちろん、大きく気候の異なる大陸部のモンスーン域と島しょ部の湿潤域で利用される樹木が異なる。

南アジアのスリランカでどんな樹木が野菜として利用されているのか、興味を持って観察していた。2日目、ダンブッラ石窟寺院からウダワッタケレ森林保護区への途中のレストラン(Ariya)と、3日目シギリアロックからキャンディへの帰りのレストラン(Ranwelli)でいくつかを見つけ、味わった。これらがただで樹木材料だとわかったわけではない。料理の前に「bread fruit」、「banana flower」、「banana blossom」、「wild mango」、「Jack」などと書かれていたからである。夕食はいつも豪華ホテルでのビュッヘだったが、樹木野菜を使ったものはどうもなかった。

Ambarella restaurant のランチ

パンノキ Bread fruit

パンノキ(*Artocarpus altilis* (クワ科)、スリランカ名 Del を煮込んだもの。黄色いカレー。見た目はジャガイモの煮込みみたい。辛くはない。(写真 1)。シンハラジャ、エンダネの Dr. Nalaka さんの実験地を訪ねた時、ランチを用意してくれていた。この中に黄色いカレーがあった。これもパンノキだったのかも知れないが、遅いお昼だったので、食べるのに必死で、食材を聞くのを忘れた。

バナナ Banana flower(blossom)

バナナの花、バナナ(*Musa* spp. バショウ科)は樹木でなく多年生木状草本、仮茎(幹)は葉がお互いに抱合したもの。マラヤ原産とされ、たくさんの品種が作りだされている。仮茎先端部から花軸(花)をだす。この花を野菜として利用する。花を細かく刻んで煮込んだもの。hot curry と書いてあったが辛い。(写真 2)

マンゴー Wild mango

マンゴー (*Mangifera indica* ウルシ科)、スリランカ名 Amba の野生種とされる小さなマンゴーの果実の煮もの Amba mar という料理。種子が大きく丸い、糸状の繊維が邪魔をしてあまりおいしくない。(写真 3)

Ranwelli restaurant、Kandyのランチ

ジャックフルーツ(パラミツ) Jack

ジャックフルーツ(Jack fruit)(パラミツ) *Artocarpus heterophyllus* (クワ科)は南インド・ミャンマー原産とされる。幹生花(幹)、果実は通常 10~20 kg、最大 42 kgとか 60 kgといわれる。この幼果をカレー状に煮込んだもの、辛くなかった。

オオバギ餅

オオバギ(*Mallotus* spp. トウダイグサ科)にはたくさんの種類がある。ペラデーニア植物園から Kandy 佛歯寺への途中のレストラン Honey Pot にあったお菓子。オオバギの葉 1 枚を折りたたみ、その中に扁平に紫色のクレープのようなものが挟んである。葉脈が浮かび上がっている。Kanda leaf といっていた。これを Kanda Halapa という、ここで 1 個 100 SR、味は甘く、砂糖でなくヤシ糖のようだ。もとじはソバ粉だったというが、これは米粉。葉の香りが残る。Udawalawe 国立公園でのサファリの後、コロンボへの途中サービスエリア

の売店にもあった。ここでは2つ 540 SR。電子レンジで温めてくれた。参加者が一斉に手を伸ばしてちぎり、すぐになくなった。奄美大島に同様にオオバギの葉で包んだオオバギ餅がある。(写真 5)

参考書

渡辺弘之：熱帯林の恵み 京都大学学術出版会 (2007)

渡辺弘之：熱帯の森から 森林研究フィールドノート あっぶる出版社 (2010)

添付写真



1 パンノキ



2 バナナの花



3 マンゴー



4 ジャックフルーツ



5 オオバギ餅

Happy Food



3/8 Ariya restaurant
3/9 Ranveli restaurant

「先生！つぎ、どこにします？」
一旅の行先が決まるときー
中西宣夫

今回は中国東方航空を利用して、スリランカ行きのツアーを企画した。機内設備にはあまり期待していなかったが、座席には個別モニターが付いていて、好きな映画を楽しむことができた。中国映画のラインナップが意外に充実しており、あまり聞いたことのないタイトルが並んでいる。

せっかくだからと、ほとんどあてずっぽうで、面白そうなカバー写真の作品を選んでみた。英語のタイトルは The Lychee Road（中国語：长安的荔枝）という映画である。

もちろん使われているのは中国語で、英語字幕は長くて速く、ほとんど読み切れない。それでも映像は十分に面白そうで、つかみは悪くなかった。コメディ仕立てで、俳優の表情や演出も大げさだ。言葉が分からなくても、だいたいのストーリーは追うことができる。

物語は唐の時代、皇帝の寵妃の誕生日のために、南方の嶺南から都の長安まで約五千里（約二五〇〇キロ）の距離を、新鮮なライチのまま運べ、という無謀な命令を下級役人が押し付けられるところから始まる。不可能に近い任務に悪戦苦闘する様子が、コミカルに描かれている。

ライチを運ぶという一見ささいな出来事から、皇帝の権力、宮廷政治、当時の交通や物流の仕組みなど、壮大な歴史世界の裏側が見えてくる。そして、その中でもがく一人の下級役人に、いつのまにか感情移入してしまう。

映画では、都の長安とは対照的に、ライチの産地である嶺南の風景や人々の暮らしも描かれていた。中国にも、こんな南方的な世界があるのかと思った。まるでボルネオのようである。

コロomboのホテルの前の線路を越えた堤防で、劉ちゃんと海を眺めながらビデオを吸っていたとき、この映画の話をした。すると彼女は、楊貴妃がライチを好み、南方から急送させたという逸話は史実としても知られている、と教えてくれた。

劉ちゃんによれば、渡辺先生は雲南に行きたがっておられるという。

雲南もまた、中国南方の地域である。中国の南方には、まだ見ていない熱帯世界が広がっている。渡辺先生と行く雲南への旅を企画したくなった。

旅の行先は、いつもこんなふうにして唐突に決まる。スリランカにしてもそうだった。

もともとは二〇二四年に「渡辺先生と行くボルネオツアー」を実施し、参加者の満足度も高かったので、このツアーを継続的に行っていこうと考えていた。先生も「ぜひに」と言ってくださっていた。

しかし翌年一月、計画の詳細を渡辺先生に相談したところ、今年はボルネオには行けないという。理由を聞くと、次はスリランカに行ってペラデニア植物園を見なければならないからだというのである。

それまで頭の中で描いていたさまざまなイメージが一瞬で消え、頭の中がまっ黄っ黄、まるで具のないカレーのようになってしまった。しかし返信のメールでは、私はほとんど反射的に、そのツアーへの参加を申し出ていた。迷ったときはカレーだ。何か困ったことがあってもうまいカレーを食っているときは忘れられる。カレーを選べばいつもほぼ間違いはない。

その後、実はまだ具体的な計画が何も決まっていなかったことを知った。そこで積極的に提案を重ねるうちに、いつのまにかこのツアーの企画をほぼすべて担当することになった。

二〇二五年二月、具なしカレーの状態から情報を集め、さまざまなネットワークをたどりながら、宇埜

さんにも協力していただいて企画を何度も練り直した。その過程で、スリランカの一般市民との絆を継続的に築いておられる市民団体の方と知り合うことができた。また、渡辺先生のお嬢さんが協力隊としてスリランカに滞在しておられた経験があることも知った。

さらに、そのご主人がスリランカ人のペレーラさんで、京都で Peperacha（ペペラッチャ）というスリランカ料理店を経営されていることも分かった。ペペラッチャで渡辺先生と打ち合わせをしてからは、ペレーラさんからいろいろとアドバイスをいただくようになった。シンハラジャ自然保護区とナラカ博士のプロジェクト地訪問を旅程に入れたのはペレーラさんの強いお勧めによる。

また、最終的にポファム樹木園、ウダワッタケレ森林保護区、ウダワラウエ国立公園への訪問をうまく組み込んで現地の手配をしてくださったのは、ペレーラさんに紹介していただいた現地ツアー会社の担当者である。ツアー最終日にホテルまでご挨拶に来てくださったサノジさん、その人である。

そんなふうにして一年がかりで作ったのが、今回の旅程である。

私は旅の枠組みを作らせていただいたにすぎないが、その中でどんなエピソードが生まれたのかは、この冊子の中に記されている。



2026/03/07-15



スリランカ
自然と世界遺産の旅